

プラグマティズムの再検討 新たな(主観性/客観性)に向けて

提題者

乗立雄輝(東京大学)
川瀬和也(宮崎公立大学)
白川晋太郎(福井大学)

司会

齋藤直子(京都大学)
大河内泰樹(京都大学)

19世紀後半にアメリカで誕生したプラグマティズムは、この150年の間に大きな発展を遂げた。しかし、パースが定式化し、ジェイムズが普及させ、そしてデュエイ、ミードにより社会的な応用につながられたプラグマティズムであるが、その内容の実質については様々な議論が存在し、明確に共通見解が定まっているとはいえない。さらに、20世紀半ば以降、クワインやパトナムをはじめとしてプラグマティズムは分析哲学と融合しながら発展してきた。そこから、ローティやブランダムの新・プラグマティズムが生み出され、さらにこれに対して近年ではミサックが古典的プラグマティズムを参照しながらニュー・プラグマティズムを打ち出している。このようにプラグマティズムはひとつの潮流というよりは、様々な支流を持つ大河に例えられよう。実際、そうしたプラグマティズムの諸相を描き出す研究も様々現れている(伊藤2016; バーンスタイン2017; ミサック2019など)。

またプラグマティズムの他の哲学潮流との融合、ないしは影響についていえば、必ずしも分析哲学に限られたものではない。ドイツで受容されたパースの理論は、アーペルやハーバーマースによって超越論的語用論、討議倫理学へと発展させられたし、ローティがハイデガーやフーコーなど大陸哲学の議論に通じていたことはよく知られている。そして近年ではローティの弟子でもあるブランダムが*A Spirit of Trust*(2019)というヘーゲル『精神現象学』についての大著を著すなど、ドイツ古典哲学とプラグマティズムの接点も見いだされている。

本シンポジウムでは、古典的プラグマティズムと近年のネオ・プラグマティズム/ニュー・プラグマティズムの交差に切り込むことによって、こうして発展/多角化してきたプラグマティズムの新たな可能性を探ることを試みたい。これに切り込む一つの視座として、私たちは、「主観性/客観性」を共通した議論の軸として設定した。この古くて新しい主題が、誕生から150年を経て、多様な側面を見せながらも一つの潮流を形作ってきたプラグマティズムの独自性を紐解く上での手がかりとなると考えられるからである。

パースの科学者共同体の諸意見の収束点としての真理概念や、デュエイの「保証された主張可能性」概念などプラグマティズムは当初から、主観と客観の対置構造を超える形で、代替的な客観性概念を提示してきたと言える。そしてまた近年ではこれが、古典的プラグマティズムとネオ/ニュー・プラグマティズムのまさに狭間で、上記のドイツ古典哲学との接近も相まって、「観念論/実在論」をめぐる議論へと発展している。そこで本シンポジウムでは、古典的プラグマティズム、ネオ・プラグマティズム、ドイツ古典哲学をそれぞれ専門とする三人の研究者をお迎えして、主観性/客観性というテーマをめぐって、古典的プラグマティズム/ネオ・プラグマティズムとニュー・プラグマティズム/ド

イツ古典哲学の近さと隔たりを浮き彫りにすることを試みる。

パース、ジェイムズという古典的プラグマティストを専門とする乗立雄輝氏には、パースの *ens rationis* という概念を軸に、パースが主観性と客観性との関係をどのように理解していたのかについて論じていただく。とくに、通常は *ens reale* と対置される概念である *ens rationis* をパースはむしろ重ね合わせて理解することがあり、ここには、主観的なものが客観的なものでもあり得るというパース独特の主張が見て取れる。パースは自らの立場を「客観的観念論」とも読んでおり、ブランダムの評価するヘーゲルとの接点も見取れるように思われる。

それに対して日本ではじめてブランダムについての単著(白川2021)を著した白川晋太郎氏には、近年のプラグマティズムにおける客観性の取り扱いについて論じていただく。白川氏によれば、近年のプラグマティズムの傾向は、ローティによって主観主義的な方向に進んだプラグマティズムに客観性を取り戻させようとする傾向として理解することができる。そのなかで、そうした傾向が典型的に現れているとされるミサックとブランダムを比較し、これを特に彼女/彼らによるパース評価と関係づけながら、最新のプラグマティストたちにおいて客観性がどのように議論されているのか論じていただく。

最後に、ヘーゲル哲学と現代英語圏の哲学を架橋する研究に従事してこられた川瀬和也氏には、プラグマティズムとドイツ古典哲学との関係について論じていただく。そこで特に取り上げられるのはブランダムがヘーゲルについて論じた大著 *A Spirit of Trust* である。そこでブランダムは、言語的規範を範型として規範の成立可能性の問題を扱う哲学者としてヘーゲルを読んでおり、そうした読みを通じて彼自身の支持する①全体論的意味論、②社会性を重視する語用論を見いだす。また、③歴史性と想起というヘーゲル的な概念が、そうしたプラグマティズムの中で重要なものとして位置づけられることになる。

三者の議論を通じて、誕生から現代に至るまで、分析哲学やドイツ古典哲学と交わりながら独自の発展を続けてきたプラグマティズムの姿を提示できればと思う。

参考:

- 伊藤邦武『プラグマティズム入門』(ちくま新書、2016年)
リチャード・バーンスタイン『哲学のプラグマティズム的転回』廣瀬 覚・佐藤駿訳、(岩波書店、2017年)
大河内泰樹「ヘーゲルとプラグマティズム」『思想』1100号、2015年12月、pp. 94-107
齋藤直子「科学の客観性・技術の普遍性 —プラグマティズム、懐疑主義、悲劇の感覚」飯田隆他編『岩波講座 哲学09』岩波書店、2008年
白川晋太郎『ブランダム 推論主義の哲学 プラグマティズムの新展開』(青土社、2021年)
シュリル・ミサック『プラグマティズムの歩き方』、加藤隆文訳(勁草書房、2019年)
Robert Brandom, *A Spirit of Trust: A Reading of Hegel's Phenomenology* (Cambridge, MA: Harvard University Press), 2019.
Robert Lane, *Peirce on Realism and Idealism*, Cambridge University Press, 2018.